瘤の増大はない.

27）完全直腸脱に対する Miwa-Gant の手術々式とその遠隔成績

吉田　鉄郎（長岡市医療法人誠心会吉田病院外科）

完全直腸脱の手術式は約900種類あり，本邦及び世界各国においては開腹して直腸を剝離して吊り上げ脊椎に固定する術式が主流を占めております．私は三輪徳定博士（新潟医専大正9年卒）の直接指導を受け，しぼり染め縫合による直腸壁縫縮術と Fascia lata を用いる Thiersch の手術を合併して行うことによりよい成績を得ており，開腹手術を全く必要としません．Thiersch 法により肛門輪を狭縮させる材質としては Nylon monofilament や Surgilon などを使用してみましたが，Fascia 使用例に長期治癒の症例（18～19年経過）が多く，現在殆どの症例に Fascia lata 紐の自家移植をやっております．これらの術式別の遠隔成績と広筋膜移植 Thiersch，＋直腸壁縫縮術，Miwa-Gant の手術（吉田変法）につき報告したいと思います．

28）肛門より脱出嵌頓した全周性直腸 villous tumor の1例

近藤　典子・星井　達彦
松本　春信・多田　哲也
藪崎　　裕　　（立川綜合病院外科）
山井　健介　　（山　井　医　院）

肛門より脱出嵌頓した全周性直腸 villous tumor の1例を経験したので報告する．

症例は65歳女性で，肛門部の腫瘤を主訴に当科受診した．初診時，直腸腫瘍の肛門からの脱出嵌頓を認め，生検後に還納した．注腸，大腸内視鏡にて，局在 RaRb の villous tumor と診断し，低位前方切除術を施行した．病理所見は，大部分 tubulovillous adenoma で一部に well differentiated adenocarcinoma の像があり，わずかに sm 浸潤を認める，ly 0，v 0，n（－）であった．術後経過は良好で，第22病日に退院となった．

29）当院における Peutz-Jeghers 症候群の2例

生天目信之・富山　武美（豊栄病院外科）

Peutz-Jeghers 症候群は特有な色素沈着と消化管ポリポシスを合併する遺伝性の独立疾患として1921年に Peutz 及び1949年に Jeghers によりその概念が明らかにされた．以前は P-J ポリープは Bartholomew（1957）らの言う過誤腫であるため悪性化はしないという見解が長く支配的であったが，最近ポリープに悪性病変が見られた症例が報告されてきており，八重樫らは本症の15.3％に消化管癌がみられたと報告した．また須田らはポリープの径と癌化率は正の相関を示し 3 cm を越えると15％に癌化を認めたと報告している．しかし 7 mm の小腸のポリープに一部癌化を認めたとの報告もあり，そのため今日では積極的な内視鏡的ポリペクトミーが推奨され，また手術的にポリペクトミーをする際にも少ない侵襲で行われることが望ましいとされている．今回 P-J ポリープにて腸重積を合併した Peutz-Jeghers 症候群の患者を，粘膜翻転法にて術中ポリペクトミーを行った2例を報告する．

30）Mesh-plug 法による成人鼠径，大腿ヘルニア修復術の検討

篠川　　主・平野謙一郎
香山　誠司・鰐渕　　勉（南部郷総合病院外科）
佐藤　　巖

平成8年8月22日より本年3月6日まで当科で経験した Mesh-plug 法による成人鼠径，大腿ヘルニア修復術は22例（23回）であった．年齢は32～90（63.2±14.5）歳で，鼠径ヘルニアが19例（20回）大腿ヘルニアが3例だった．内・外鼠径ヘルニアの合併例が1例あり初回外鼠径ヘルニアを修復しなかったため，1.5カ月後に再度 Mesh-plug 法修復術を行った．術後の合併症は創部の硬結を2例に認めたが，疼痛や歩行障害，再発を来したものは無かった．術後第1病日より歩行を許可し，術後入院期間は他疾患合併例1例を除き21例（22回）が1～9（5.8±2.6）日で，4例が第1病日に退院できた．術後鎮痛剤は9例が不要で，手術当日のみの使用者は6例だった．Mesh-plug 法は疼痛が軽度で安全な術式と考えられた．